

～人権文化の花咲くまち 西宮をめざして 5～

# 「優しさ」という ビタミン愛



西宮市・西宮市教育委員会



図書館で「花さき山」(作・斎藤隆介 絵・滝平二郎 岩崎書店)  
という絵本をみつけました。

「優しいことを一つすると、花さき山に一つ花が咲く。」

そんなお話でした。

私たちのまちには「優しさの花」はどれくらい咲いているでしょう。

優しいという漢字は、「イ (にんべん)」に「憂い」と書きますが、  
本当は「憂い」の横に「イ (にんべん)」だと思のです。

なぜかというと

憂いのある人の横に、にんべんつまり人が寄り添うことが  
「優しい」ということだと思のです。

また、朱 宰実 (チュ チェシル) という  
在日韓国人の子ども (5年生) が、

「優しい」という字は「憂いのある人の横に、人が寄り添う」  
という意味だけど、

私には「憂い」という字は「百」と「愛」に見えるよ。

憂いのある人には百の愛が必要なんだと思よ。

だから、優しいという字は

「人には百の愛がある」と書くだね。

と話してくれました。

「人には百の愛がある」・・・

そんな「愛」を少し探してみました・・・

## 「10秒」の愛

子どもは忙しい時にかぎってよく声をかけてきます。

たとえば、夕食の支度に忙しい時に

「おかあさん、おかあさん」って近づいてきたら  
どうしましょう？

そんな時は、たった10秒でいいのです、

支度している手をとめて、

「ごめんね、今、手が離せないのであとでゆっくり聞くね」  
と言って、

10秒間だけしっかりと抱きしめてあげてください。

きっと、子どもは笑顔で待ってくれますから・・・

子どもが、たどたどしく話しかけてきたらどうしましょう？

聞いていてイライラすることもあるでしょう。

そんな時いつもより

10秒間だけ待ってあげてください。

きっと、子どもは笑顔になりますから・・・

たかが10秒、されど10秒です。

子どもが育つ「10秒の魔法」なのです。



## 「おばちゃん」の愛

ある地域の青愛協の方のお話です。

夕方暗くなったころ、帰っている中学生たちに向かって「気をつけて帰りよ」と一声かけると、その中学生は「なんで、おばはんと言われなあかんねん！」と捨てゼリフ。「あんたたちのこと、おばはん心配やから言うたんやほんま、車に気をつけて帰りや」  
「・・・・・・・・」

中学生たちは、無視して、さっさと行ってしまいました。

それから数日後、またその子たちに出会いました。また「気をつけて帰りや」と声をかけると「おばはんも、気つけてな」とすぐに返事。

それからまた数日後、夜、歩いて帰っていると、あの中学生が自転車に乗ってこちらの方向に走ってきました。すれ違いざま、中学生は「おばちゃん、気つけて帰りや」とひとこと言って、走りすぎて行きました。「ありがとう！」のおばちゃんの声の背に受けながら・・・



## 「歯医者さん」の愛

歯医者さんで「親知らず」を抜きました。  
ミシッという音と共に大きな「親知らず」が抜けました。  
大きな穴が残りました。

帰るとき、  
「もし痛くなったら、この薬を飲んでくださいね」  
その言葉がかえって、不安感をよびました。

夜の10時、一本の電話がかかってきました。  
「どう？痛くない？大丈夫？」  
「はい、大丈夫です。わざわざありがとうございました」  
「でももし痛くなったら、夜中でも電話くださいね。  
すぐに診てあげるから・・・」  
その言葉が私に安心感をあたえました。

あれから20年。引越しもしました。  
でも歯が痛くなったら、今も電車に乗って  
その歯医者さんに通っています。

## 「エレベーター」の愛

仕事を終え、自宅マンションにたどりついた時  
1階にエレベーターが止まっていたら、  
つい「ラッキー！」と  
思ってしまう。

ある時、偶然に高校生の息子と一緒にになり、  
エレベーターに乗りました。  
5階に着き一緒に降りようとした時、  
息子は1階のボタンを押してから降りたのです。  
「なんで？」って聞くと  
「1階にあったらうれしいやろ」の一言。

そんな息子を  
まぶしく見た父親でした。



## 「コンビニ」の愛

お昼によく利用するコンビニに入ると、  
「こんにちは」と店員さんがいつもあいさつをしてくれます。  
でも返事をしたことはありませんでした。

ある時仕事が忙しく、昼食が3時ごろになってしまいました。  
レジで精算のとき、店員さんが  
「お忙しそうですね。お体お大事にしてくださいね。」と  
一言かけてくれました。

ある時おなかの調子が悪かったので、「おかゆ」を買いました。  
すると  
「大丈夫ですか。あまり無理なさらさないでくださいね」と  
一言かけてくれました。

何のつながりもない店員さんからの  
こんな温かい一言にいつも元気づけられている私です。  
もちろん今は私も「こんにちは」とあいさつをしています。



## 「写メール」の愛

ある小学校の仲よし学級の先生ともう一人のA先生のお話です。

自然学校がありました。

仲よし学級の5年生の子が自然学校に参加しました。

仲よし学級の担任は、他学年の2人を残して、

自然学校に同行しました。

残した2人の子どもをのことを気にしながらの出発でした。

2日目、学校の教室でがんばっている2人を見て、

A先生は思いつきます。

「そうだ、この間、機種変更した私の携帯にはカメラがついている。

これでこの子たちを撮ろう」

初めての撮影です。何枚も撮りました。そして、説明書を見て、

八子高原にいる担任へ初めての「写メール」を送りました。

担任は感激しました。

お礼に、八子高原でがんばっている5年生の子の写真を

今度はA先生に「写メール」です。

A先生は感激しました。

「あの子が頂上まで登っている。車椅子のあの子が頑張りぬいた」

そして、A先生はまたまた思いつきます。



5分後、A先生は自転車に乗っていました。

しばらくして5年生の子の家に到着です。

「おかあさん！今担任の先生から、写メールが届いたので、

届けに来ました。八子高原登山をやりぬきましたよ。

ほら、この写真です！」

玄関先で、お母さんは涙をいっぱいためながら・・・息子の名前

と先生の名前と「ありがとう」を小さな声でつぶやきました。

A先生は、とっても温かい気持ちでその家をあとにしました・・・。

きっとその時、

八子高原にいる担任の先生にも温かさが届いたことでしょう。

## 「姉」の愛

姉は、昨年、大学入試に失敗しました。  
浪人でのぞんだ今年の入試。いろんな思いを込めて  
この日を迎えました。でも結果は、不合格。  
家族を避けるように一人で部屋にこもりました。

夜中の2時、リビングに明かりが……。  
そっとのぞいてみると  
そこには、宮崎駿の「耳をすませば」のビデオを  
じっと見ている姉がいました。  
声をかけることができませんでした。涙がこぼれました。

その日の朝から姉は、  
以前と変わらない笑顔で家族に接してきました。

1週間後、弟の高校入試がありました。  
緊張感からか弟は、二日前から熱を出しました。  
40度をこえました。  
姉は、昼間だけでなく夜中もずっと弟の看病を  
してくれました。  
「がんばれ」とも何も言わずに、  
何度も何度も氷を替えてくれました。  
入試当日も熱は下がりませんでした。  
でも弟は全力で頑張りました。

4日後、合格発表がありました。……合格でした。

その時の弟と姉の笑顔を、私は一生忘れないでしょう。  
こんな優しい子がいて……。  
私は本当に幸せな母親です……。





## 「体操服」の愛

9月の半ば、学校では運動会の練習に熱が入ります。  
6年生は、組み立て体操に必死で取り組んでいました。

浩二は4段ピラミッドの一番下の土台の部分です。  
浩二は痛さに我慢できずにぐずれることがよくありました。  
その度に先生に「しっかりせい！」と怒鳴られるのでした。  
(なんでこんなに痛いことをしないといけないんだ)  
(なんで俺ばかり叱られるんだ、もういやだ)



家に帰ると母から

「洗濯するから、汚れ物を出しなさい」と言われ  
イライラから、つい母に体操服を投げてつけてしまいました。  
それを受け取った母は、はじめ怖い顔をしていましたが  
やがて柔らかな表情になり

「浩二、あなたよくがんばっているのね」と話しかけました。  
「そんなこと、なんで母さんにわかるんや」と言い返すと  
「あなたの体操服、肩と背中部分が汚れているでしょ。  
あなた、ピラミッドで一番下をやっている  
って言ってたでしょ。」

浩二の上に何人も友達が乗っているでしょ。

痛いだらうによくがんばっているのね」

「まあな」と浩二は、少し照れながらさっさと自分の部屋に  
入ってしまいました。

次の日、組み立て体操の練習の時、

そこには、黙って歯を食いしばる浩二の姿がありました。

「よーし、いいぞ浩二！」

大声でほめる先生には、なぜ浩二ががんばっていたかは  
その時は、わかりませんでした。

## 「沢村さん」の愛

沢村さんは、地域の活動や学校のPTAの活動にいつも一生懸命に動いてくれる人でした。地域のためなら、子どもたちのためなら、どんなしんどいことでもいやな顔一つせず、いつも動いてくれる人でした。同和問題や在日外国人問題でも、いつも笑顔でみんなのつなぎ役をしてくれました。みんなに、そして多くの子どもたちから愛されていた沢村さんでした。

その沢村さんが亡くなりました。あの大震災で、息子の大君をかばいながら、二人とも天国に逝ってしまいました。亡がらは息子を守る必死の形相でした。涙が止まりませんでした。



そのあと、避難所で沢村さんのような格好をした人を見た、幽霊かも……。そんな声を聞きました。

私はそれは絶対に沢村さんだと思いました。きっと避難所のことが心配で私たちのことを見てくれていたのです。私はその晩、沢村さんの家に行って、位牌の前で話しました。

「沢村さんありがとう。でももう大丈夫だよ。ゆっくり天国で休んでいていいよ。大ちゃんのそばにいてあげてね」

それからは、誰も沢村さんを見たという人はいませんでした。

きっと今でも沢村さんは、天国から私たちのことを見守ってくれています。

沢村さんのためにがんばりたい、沢村さんの分までがんばりたい。そう思っているのは私だけではありません。みんなに愛された沢村さん、大ちゃん、お父さん……。本当にありがとうございました。

安らかにお眠りください。



人権文化の花咲くまち 西宮をめざして 5

平成16年（2004年）2月  
西宮市・西宮市教育委員会

「優しさ」というビタミン愛  
文・仲島正教  
画・中西徹